

火山学会がやってきた

萬年一剛（神奈川県温泉地学研究所）

はじめに

昨年（2009 年）10 月 10 日から 12 日まで、神奈川県立生命の星・地球博物館と当所の共催で、日本火山学会 2009 年秋季大会を開催しました。日本火山学会は、火山を対象とする研究者の集まりです。この大会は、毎年秋に実施され、毎年各地を巡回する形で開催されています。ここでは、どうして火山学会が小田原で開催されることになったのか、また、どういうものだったのか、紹介したいと思います。

きっかけは居酒屋

2008 年 3 月 10 日と 11 日、東京大学地震研究所共同研究の一環として熊本県大津市で「カルデラ勉強会」というものが開催されました。これは、カルデラを形成するような巨大噴火がどうして起きるのかについて様々な側面から検討をする会議で、当所からは私だけが参加しましたが、10 日の夜に、居酒屋でささやかな慰労会がありました。私がそこで談笑していると、九州大学の松島健さんが、「2009 年の火山学会秋季大会なんですけど、予定していたところがダメそうなので、小田原市あたりで何とかありませんか」と話しかけてこられました。松島さんはとても困った顔をしていたので、持ち帰って聞いてみますとうっかり答えてしまいました。火山学会の秋季大会はだいたい 300 名弱の参

加者があり、2 つの講演会場と、1 つのポスター会場を用意する必要があります。これは、温地研では収容しきれません。しかし、今から考えればひどい話ですが、温地研の隣にある生命の星・地球博物館なら以前も学会を開いたことがあるし（別の所属なのに失礼な話で反省しています）、ダメでも小田原市の市民会館があるから何とかなるだろうと思いました。

メイン会場は博物館に

帰ってから、生命の星・地球博物館の平田大二学芸部長に上のような話をしたところ、基本的にはいい話なので、館長を含めて意見を聞いて調整してみると、予想以上に色よい返事を頂きました。そのうち、博物館の斎藤靖二館長から大変良い話なのでぜひ話を進めて欲しいという御返事をいただき、2008 年 4 月 17 日に松島さんが小田原にみえて、会場予定地を下見されました。一連の話し合いの中で、ミュージアムシアターを A 会場、間仕切りできる講義室をぶち抜いて B 会場、エントランスホールの奥をポスター会場とする会場レイアウトの骨格が決まりました。その後、同年 5 月 25 日に開かれた火山学会の理事会で正式な会場として決定され、何回かのやりとりを経て大会前年の 2008 年 8 月末に、正式な依頼文が当所と博物館に届きました。

受け入れ態勢

秋季大会の会場は基本的に 2 つの講演会場とポスター会場、ポスターを貼るボードを用意すれば良く、博物館はとても理想的な建物といえます。しかし、博物館には来館者があるので、来館者の不便や事故がないように準備しなくてはなりません。それに調べてみると、博物館はそのとき特別展を開催中で、ポスターボードが足りなくなることがわかりました。これをどこから調達しなくてははいけません。

そのほか、食事をどうするかという問題もあります。博物館のある入生田地区は食堂が全くなく、館内にもレストランが 1 つあるだけです。コンビニも 1 軒のみで、当日昼食を持参していないとなかなか大変です。それに昼食を用意して学会に行っても、食べるところがあまりないのです。一般来館者と場所の取り合いになってはいけません。

また、当日のアルバイトをどうやって配置するか、募集はどうするのかというのも問題です。こうした諸々のことをいつもやっていれば慣れてくるのですが、なにぶんはじめてのことなので、何をどうすればいいのか、現地実行委員会（LOC: local organization committee）を作って検討することになりました。

LOC の会合

LOC は、博物館が平田大二学芸部長、笠間友博主任研究員、山下浩



写真 1 火山防災シンポジウムの様子（博物館ミュージアムホール；松島健さん撮影）

之主任研究員、当所が杉原英和企画調整担当部長、棚田俊收主任研究員、代田寧主任研究員、筆者で主に構成することにしました。基本的には博物館が会場設計と会場運営、当所が会計や学会との連絡など諸々の事務作業を分担するという大枠で大会開催に向けて話し合いを進めていきました。

第1回の会合は、開催当年の2009年3月25日で、受け入れの経緯を紹介した後、日程の概要決定、担当者の分担、各会場の割り当て、人員配置、会場準備の内容と日程の原案を示して、議論をしました。

第2回会合（4月15日）では、1回目の会合を踏まえて、タイムテーブルを作成しました。このタイムテーブルは大会期間中、各所で何が行われているかを一覧出来るものです。以後の会議では、主にこのタイムテーブルに人員配置を書き込んで

いくなどして、徐々に高精度化していきました。また、予算の概要を作成しました。

第3回会合（6月4日）では、ポスターボードと昼食会場に設置するテーブルセットを借りるレンタル会社を、2社の見積合わせにより決定し、予算の一番大きい支出項目が決まりました。この日は、マスコミの参加費をどうするか、懇親会の会計をどうするか、火山学会に合わせて行われる各種イベントの周知方法を検討したほか、火山学会誌に告知する原稿の内容を最終的に決定しました。

第4回会合（7月15日）では、博物館の山下主任研究員に会場のプランを作っていただいて、確保する机やイスの数を見積もったほか、各種イベントの内容をおおむね確定しました。また、団体展示と言って各種団体が技術や出版物を展示するた

めのブースを設けることにしたのですが、その方々への出展呼びかけ方法などを決めました。

第5回会合（9月2日）の前の、8月28日には当所で火山学会のプログラム編成委員会が開催され、講演数と日程が確定しました。このため、第5回会合では、ポスターの配置を最終的に決めました。また、大会当日に用意する予約制のお弁当について、プログラム編成委員会で試食したところ美味しくないという意見が出たため、業者の変更をすることを決めました。このほか、懇親会場への行き方を記したプリント作成、LOC要員の名札の作成など、細かいことが決まりはじめました。

第6回会合（9月11日）には、会場へのアルバイト割り振りを決めて、募集にかかることにしました。また、団体展示のレイアウト検討を博物館にお願いするなど、会場設営



写真2 盛り上がったポスター会場（博物館エントランスホール）

の調整も最終段階になりました。また、当日必要な物品の買い出しメモを作ることになりました。

第7回会合（10月1日）は、アルバイトの人数が確定して配置が決まったほか、弁当の注文数なども確定しました。懇親会のプログラムもこのときに決まり、後は開催を待つだけとなりました。この日は、これまでLOCで議論してきたメンバーに加え、当日に働いていただく、博物館の新井田主任研究員、当所の本多、原田、小田原、行竹各技師らにも参加していただき、会場の見学をしました。

直前の準備

大会で参加者に配布する予稿集や各種パンフレットなどは、10月6日に当所所員総出で袋詰めをして、博物館に送りました。8日にはその

他の机やイスなどの物品を送り、準備万端整いました。と、書くといかにもすんなり準備をしたような感じがありますが、それなりにいろいろありました。たとえば、当時はインフルエンザが猛威をふるっていたので、学会参加者用にアルコール消毒液が必要だという指摘を受けてドラッグストアに走ったり、アルバイトには保険をかけなくてはまずいだろうということで、あわてて保険代理店に行ったりと、周到にやったつもりでもいろいろ細々とした仕事がありました。

これに加えて同時開催のイベントの準備が大変でした。たとえば、秋季大会と平行して10日と11日の午後に「公開講座『火山学者と火山を作ろう in 箱根・小田原』』というイベントを当所で催したのですが、そのテキスト作りが押せ押せの状態、編集が9月27日に終了、印刷

物の納品が10月7日とぎりぎりでした。そのほか、12日午後から行われた野外討論会の準備や、秋季大会そのものの発表準備なども重なり、直前は休む間がありませんでした。

本番の様子

火山防災シンポジウム

大会前日の9日午後（13：30～17：30）には、プレイベントとして、日本火山学会火山防災委員会主催の「火山防災シンポジウム—あすの火山防災を考える」が、博物館ミュージアムシアターで開催されました（写真1）。参加者は200名余りで、中村洋一氏（宇都宮大学）の司会により、前半の第一部は「箱根火山防災はどう変わった - 噴火警戒レベル導入を通して -」、後半の第二部は「大規模噴火時における広域火山防災のあり方」と題して、講演



写真3 カフェテラスと化した博物館3階のテラス

とパネルディスカッションが行われました。

第一部では、2001年に発生した群発地震とそれに伴う噴気異常を契機として、急速に火山防災体制が整備された箱根火山について、その経緯、地震研究、噴火警戒レベルの導入、町の地理的背景や役場の態勢、神奈川県火山防災体制について紹介が行われ、町・県・当所の取り組

みを広くアピールする場になったと思います。

第二部では、火山観測や防災に対する先進的な取り組みが行われてきた、十勝、北海道駒ヶ岳、桜島などの火山における防災体制についての紹介や現状での問題点の指摘が行われたあと、レベル4や5など、国が対応に乗り出さなくてはならないような噴火時の態勢に関して予定時間

を若干オーバーする活発な議論が行われました。

学術講演会

学術講演会とは研究者が研究者向きに発表を行う、いわゆる「学会」の部分です。これは10日から12日午前中まで実施され、99件の口頭発表と70件のポスター発表がありました。参加者数は293名（会員204名、学生会員57名、非会員32名）でした。この数は例年より2割程度多く、首都圏、それも博物館での開催が盛り上がった要因と見られます（写真2）。懸案だった10日と11日のお昼ご飯は、お弁当の予約注文をとったのと、博物館3階のテラスにテーブル席を設けた結果、大きな混乱がなくホッとしました（写真3）。11日夜には風祭のイベント会場で、懇親会を開催しました（写真4）。

火山学者と火山を作ろう

火山学会では例年、「Q & A火山学者に直接聞いてみよう」などと題して、火山学を一般市民と交流しながらわかりやすく伝える取り組みを行ってきました。今年は大会期間中の10・11日両日の午後、「火山学者と火山を作ろう in 箱根・小田原」と題し、食材や廃物を利用した「ミニ火山」を、火山学会会員である「火山学者」と抽選によって選ばれた一般市民とがチームを作って作成しながら火山のでき方や不思議について議論を深める催しを行いました（写真5）。

1日目は林信太郎会員による食材を使った「キッチン火山実験」、2日目は笠間友宏会員による廃食用油と砂を使った「ワイルド火山実験」を実施しました（写真6）。参加した一般の方は、1日目が27名、2日目が25名、見学者は1日目が



写真4 懇親会会場の様子



写真5 火山噴火実験の様子（10日キッチン火山実験・当所前庭）

18名、2日目が14名でした。

この行事の1日あたりの参加者・見学者の数は当所の行うサイエンスサマー行事などと比べるとやや少なめなのですが、内容的には非常に濃密で、「火山学者」にも地元で行うアウトリーチ活動の大きな参考になったものと見られ、大成功と言って

良いと思われます。なお、これまでの火山学会でおこなわれた講座もテキストが火山学会ホームページからダウンロードできますが、今年の分も出来ますのでご興味のある方はぜひどうぞ。



写真6 ワイルド火山実験の様子（10日ワイルド火山実験・当所会議室）

記念講演会

学術講演会は一般向けではないので、一般来館者にもわかりやすい講演を火山学者の皆さんにしてもらおうという意図から、12日午後、博物館ミュージアムシアターで日本火山学会と神奈川県立生命の星・地球博物館、温泉地学研究所の共催により「日本火山学会秋季大会開催記念講演会・火山と私たちの暮らし」を開催しました。この講演会には、一般来館者および学会参加者83名が来聴し、火山噴火のメカニズム（寅丸敦志九州大学大学院教授）、噴火や火山体の形成を再現する室内実験（笠間友博生命の星・地球博物館主任学芸員）、箱根火山研究の最前線（高橋正樹日本大学教授と筆者）などの講演に耳を傾けました。火山がどうして噴火するのかという基本的なところから、箱根火山がどういう歴史を辿ってきたのかという身近な話題までを網羅するこの講演会では、会場から活発な質問があり、予定時間を15分ほど超過し、盛況のうちに終了しました。

野外討論会

野外討論会とは、火山学会の終了後に近隣の火山を研究者の案内で見学し議論を深める催しのことで、毎回開催しています。今回は地元・箱根火山（Aコース）に加え、惜しくも大会開催が出来なかった三宅島（Bコース）の2コースにわけて実施されました。2コースに分かれたことは少なくとも近年の火山学会ではなく、参加者が分散する懸念もありましたが、幸いにも両コースとも催行人数に達し、特にAコースは満員でキャンセル待ちとなりました。

Aコースは、日本大学の高橋正樹教授、ダイヤコンサルタント株式会社の小林淳博士、筆者の3名がリーダーとなり、2泊3日の旅程で箱



写真7 野外討論会 A コース（箱根）の様子

根火山の基盤から最新の噴火までを見て回りました（写真7）。B コースは、東大が中心となって案内し、三宅島火山の過去の噴火堆積物はもちろん、2000 年噴火とその後の泥流被害をつぶさに観察する盛りだ

くさんの内容だったということです（写真8）。

皆さんに感謝！

博物館には大変快く秋季大会の開催を了承していただき、ご一緒に大

会をつくりあげて行きましたが、祝休日の博物館での開催ということで、大変申し訳なかったなという思いもしております。もちろん、学会というものがあるのか、一般の方には普段目にするものがないことなので、今回は大変貴重な機会であると思います。しかし、普段ミュージアムシアターで上映しているハイビジョン番組やクイズ映像が中止となり、それを楽しみに来館した子供達に現地実行委員や火山学会事務局がお詫びするという場面が多々見られ、改めて博物館の普段の活動が広く知られているのだなということを痛感しました。

また、博物館では、普段の閉館時間（16:30）に合わせて警備や電気系統のプログラムが組まれているところ、遅くまで続くポスター発表や講演会に対して本大会の開催のために、さまざまな作業と配慮をしていただきました。これも、ほんとうに大変なことで、斎藤館長、平田学芸部長をはじめとする博物館の皆様には、改めて感謝申し上げたいと思います。

当所では、なんと言っても金庫番の会計担当として代田主任研究員がしっかりと仕事をしていたので、間の抜けたところが多々ある筆者は足を向けて眠れません。また、杉原企画調整担当部長にはマスコミ対応など、広報関係を一手に引き受けていただきました。その他のLOC メンバーはもちろんのことですが、火山と関係のない研究をしている職員にも今回は会場作りやお弁当配布などに多大な尽力を頂きました。今回の火山学会秋季大会開催は、博物館と当所が一体になって成功させたといえると思います。ご協力を頂いた全ての皆様に感謝申し上げます。



写真8 野外討論会 B コース（三宅島）の様子